

詩篇75-78篇 「シオンにある力」

1A 高く上げられる方 75

1B 近くにある御名 1

2B 角を切り捨てられる神 2-10

2A 人の憤りをも取り込む賛美 76

1B 弓につがえる火矢 1-6

2B 恐るべき方 7-12

3A 変わった右の御手 77

1B 乱れる心 1-9

2B 思い起こす主の御業 10-20

4A 主の真実と人の不実 78

1B 後の世代に語り告ぐ謎 1-8

2B エフライムの忘却 9-72

1C 主の備え 19-39

2C 主の戦い 40-64

3C ユダ族の選び 65-71

本文

詩篇 75 篇を開いてください。私たちは、詩篇の第三巻に入っています。第三巻には、アサフによる賛歌が多く入っています。アサフはダビデによって任命を受けた、礼拝賛美を指揮する奉仕者です(例:1歴代 15:17)。けれども、書いている人はアサフ本人だけでなく、アサフの子孫、アサフ氏族にいる人が書いていると思います。これまでダビデによる賛歌では、シオンにこそ主がご臨在されていて、そこに力があることが強調されていました。けれども、ダビデ王朝は 597 年のバビロン捕囚によって途絶えてしまいました。そして 586 年のエルサレムの神殿破壊によって、神殿礼拝も途絶えてしまいました。

シオンがなくなっているということは、それゆえ礼拝を喪失したというとてもない絶望感に満ちた嘆きになる訳です。新約時代には、信じている者に聖霊が宿っておられ、信じる者がイエスの名で集まるところが御霊による神の神殿になっていますが、言うなれば「礼拝なき信仰生活」ということが、いかに絶望的で、苦難に満ちたことか、そのことをアサフは多く賛歌の中で描いています。前回の学びで 74 篇が、その内容でした。3 節だけ読みますと、「74:3 永遠の廢墟に、あなたの足を向けてください。敵は聖所であらゆる害を加えています。」とあります。

1A 高く上げられる方 75

けれども、75 篇においてはアサフの絶望的な叫びに対して、神が聞いてくださっている内容を読

みます。そこにある神の力強い言葉を読みたいと思います。

1B 近くにある御名 1

75 指揮者のために。「滅ぼすな。」の調べに合わせて。アサフの賛歌。歌 75:1 私たちは、あなたに感謝します。神よ。私たちは感謝します。御名は、近くにあり、人々は、あなたの奇しいわざを語り告げます。

今、神の御名が近くにあるとアサフは言います。すばらしいですね、主がすぐ近くにおられます。これが物理的にバビロンから帰還した民が、神殿を再建させて主をほめたたえているのか、それとも神の御霊が臨んで、バビロンの地にながらにして礼拝が回復されているのか分かりませんが、主のご臨在を間近に感じる事ができています。

神が近くにおられる、ということだけでなく「御名が、近くにある」と言っていることに注目してください。モーセが、主なる神と語っている時に、イスラエル人から「あなたの神の名は誰か」と聞かれたらどうしようという問いをしました。神の名というのは、そこに神の本質が完全に現われているからです。そして、主はご自分の栄光の後姿を見せながら、ご自分の名を明かされたことがあります。「出エジプト 34:6-8 主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」」そして、神はエルサレムに、その聖所にご自分の名を置くと言われました(1列王 8:16)。

もちろん、主はどこにでもおられます。どんなところに行っても、決して逃げることはできない、自分がここまで落ちてしまったけれども、主の手は届かないと思っているところでも、それでも主はおられます。けれども、御名が近くにあるということは、主のすばらしい恵み、憐れみ、その良さ、真実、正義、聖なる姿、そういったものが多彩に輝いている所なのです。

2B 角を切り捨てられる神 2-10

75:2 「わたしが、定めの時を決め、わたしみずから公正にさばく。75:3 地とこれに住むすべての者が揺らぐとき、わたしは地の柱を堅く立てる。セラ 75:4 わたしは、誇る者には、『誇るな。』と言い、悪者には、『角を上げるな。75:5 おまえたちの角を、高く上げるな。横柄な態度で語るな。』と言う。」

アサフが気を取り戻すことのできた、神の励ましの言葉があります。「わたしが、定めの時を決める、ということです。アサフは、「神よ。いつまで、仇はそしめるのでしょうか。(74:10)」と叫んでいました。永久にそしられているのか、と絶望していた時に、神は「わたしは、公正にさばく時をすでに定めている。」と言われるのです。主は、今の状況にすべて関わっておられます。知らないでおられるわけではありません。そして、ご自分の由とする時に裁いてくださるのです。

そして、「わたしみずから公正にさばく」と言われています。人間の手を借りて裁かれるのではなく、神がご自分の主権で、その力で裁いてくださるのです。私たちは、苦境に陥った時に何とかしてその状況を奪還すべく、自らの手で動かそうとします。そして動かないと落胆して、ともすると神への信仰も揺らぎます。

それから主は、世界的な地震を引き起こすことを予告され、そのことによって高ぶっている者どもを低くさせる業を行われます。これは終わりの日の預言です。「黙示 6:15-17 地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかかまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」「角」とありますが、これは権威や力を表す象徴です。ですから王たちも、地震の時には一般の庶民と同じように平等になるということです。多くの方は、安定しているから誇ります。自分の価値を、自分の持っている物、財産や地位、業績、人々の評判によって押し量っています。けれども主が、それらを、地面を揺りうごかすことによって、振るい落されます。

75:6 高く上げることは、東からでもなく、西からでもなく、荒野からでもない。75:7 それは、神が、さばく方であり、これを低くし、かれを高く上げられるからだ。

神は誇り高ぶる者を低くされますが、同じように高く上げるのも神ご自身のなさることです。イスラエルの民は、異邦人の横暴な王たちに虐げられていましたが、その助けを得るために、東に行って助けを読んでも、西に行っても、また荒野、すなわち南に行ってもそこには、自分たちの尊厳を高めてくれる岩はありません。ユダの国はエジプトに頼ることが多かったですが、それでもアッシリヤの侵攻を止めることはできませんでした。ましてや、北からの助けは絶対にやってはいけないことです。かつてアハブは、アラムと北イスラエルの攻撃から救われるために、事もあろうにアッシリヤに助けを呼び求めました。しかし神のみが、高く上げてくださいます。

ここから私たちは、キリスト者生活、また奉仕の務めにおいて大事な原則を汲み取ることができます。「高く上げる」ということは、もっぱら主が行われることだということです。自分たちの肉の力、人間的な知恵で神の働きをすることはできない、ということです。この「高く上げる」という言葉は、英語では promotion と訳している聖書があります。プロモーションと言いますと、会社で使われる言葉「昇進」です。人の地位が引き上げられる、ということです。あるいは、「促進」と訳すことのできる言葉でもあります。会社では「販売促進」という言葉を使いますね。

分かり易くするために、一つ例を出しましょう。今、一人の兄弟が主から重荷が与えられ、聖霊に導かれて、路傍伝道を熱心に行っています。そして、これまで何人かの兄弟姉妹も加わっていただきました。かなりの数の教会案内のトラクトを配ることができました。それは、表面的には教会の宣伝をして、人々に来てもらい、そしてクリスチャンになることを願うという、会社の営業と変わらない

いように見えてしまいます。しかし、決してそうではありません。私たちは結果には、責任がないからです。「キリストが罪人のために世に来られた。」という偉大な真理があり、その真理に動かされて、未だイエス様を知らない人々に良き知らせを伝える、という救霊の思いでそれを行っています。つまり、キリストが自分の心におられれば、そしてキリストが私たちの間におられれば、自然にイエス様のことを伝えたいと願うのです。

けれども、仮に私が、「クリスマス礼拝の時に最低、五人の未信者を連れて来なさい。」と言ったらどうでしょうか？それが「高く上げる」ことです。救われる人を加えて与えられるのは主ご自身です。たとえ、一人の未信者を連れてくることができなくても、それでも私たちは主のご降誕をお祝いします。そして未信者の方がいらっしゃる時は、私たちは主が連れてきてくださったことを心から喜ぶのです。その未信者は、私たちに対する神の恵みと憐れみの賜物です。

75:8 主の御手には、杯があり、よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒がある。主が、これを注ぎ出されると、この世の悪者どもは、こぞって、そのかすまで飲んで、飲み干してしまふ。75:9 しかし私は、とこしえまでも告げよう。ヤコブの神を、ほめ歌おう。75:10 悪者どもの角を、ことごとく切り捨てよう。しかし、正しい者の角は、高く上げられる。

「よく混ぜ合わされた、あわだつぶどう酒」というのは、わざと酔いが回るように混ぜ合わせた酒ということです。韓国では「爆弾酒」という言葉がありますが、日本語には何か表現があるでしょうか？いずれにしても、神の怒りの衝撃をすべて受ける時に、この言葉を使います。終わりの日に、神はこのことを行ってくださいます。

ですから主が行ってくださるのですから、自分は自分の分をアサフは行います。彼は、主をほめたたえることに献身すればよいのです。私たちが苦しい時に、しなければいけないことの一つは、「いつものようにする」ということです。主にお仕えすることです。何かが起こっても、そこで自分の立ち位置を変えないことです。主に命じられていることを、忠実に行なうことです。そして最後に、「正しい者の角は、高く上げられる。」とあります。「1ペテロ 5:6 ですから、あなたがたは、神の力強い御手の下にへりくだりなさい。神が、ちょうど良い時に、あなたがたを高くしてくださるためです。」

2A 人の憤りをも取り込む賛美 76

そして76篇です。その内容は、75篇と似ています。背景は、アッシリヤに取り囲まれたエルサレムが、主の使いによってその軍隊を滅ぼした時のものと考えられます。

1B 弓につがえる火矢 1-6

76 指揮者のために。弦楽器によって。アサフの賛歌。歌 76:1 神はユダにおいて知られ、御名はイスラエルにおいて大きい。76:2 神の仮庵はシャレムにあり、その住まいはシオンにある。

75 篇と同じように、主の御名が近くにあることをアサフは感じ取っています。なぜなら今、彼はシエラム、すなわちエルサレムにいるからです。そこに主が住んでおられます。

76:3 その所で神は弓につがえる火矢、盾と剣、また戦いを打ち砕かれた。セラ 76:4 あなたは輝かしく、えじきの山々にまさって威厳があります。76:5 剛胆な者らは略奪に会い、彼らは全く眠りこけました。勇士たちはだれも、手の施しようがありませんでした。76:6 ヤコブの神よ。あなたが、お叱りになると、騎手も馬も、深い眠りに陥りました。

アッシリヤ軍が倒れた様子を、このように描いているのだと思います。エルサレムを取り囲む剛胆な兵士、そして騎手も馬もいます。彼らが一夜の内に打たれて、そこに倒れていました。それを、彼らが深い眠りに陥ったと表現しています。

主が、「神は弓につがえる火矢、盾と剣」と表現されていますね。主に拠りすがっている時に、私たちがこのように強くなれます。「ピリピ 4:12-13 私は、貧しさの中にある道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。」

2B 恐るべき方 7-12

76:7 あなたは、あなたは、恐ろしい方。あなたが怒られたら、だれが御前に立ちえましよう。76:8 あなたの宣告が天から聞こえると、地は恐れて、沈黙を守りました。76:9 神が、さばきのために、そして地上の貧しい者たちをみな、救うために、立ち上がられたそのときに。セラ

主なる神の特質の一つが、「恐ろしさ」であります。それは、高ぶる者、神を拒む者たちにとっては、そのまま恐怖の方であります。「生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。(ヘブル 11:31)」けれども、主にひれ伏す者たちにとっては恐れるといっても、畏れ多き方であります。恐怖ではなく、畏怖の念です。箴言 1 章 7 節に、「主を恐れることは知識の初めである。」とあります。それは、主から罰を受けるから恐れるものではありません。むしろ、自分が罪を犯すことによって、主の心を傷つけてしまうという恐れです。これが不信者の抱く神への恐れと、信仰者の持っている神への恐れの違いです。そして、主は、へりくだる者、心の貧しい者たちのためには必ず、救いの神として現れてくださいます。

76:10 まことに、人の憤りまでもが、あなたをほめたたえ、あなたは、憤りの余りまでも身に締められます。

これはとても意外な、けれども深い真理を示している言葉です。アッシリヤが、激しい憤りをもってエルサレムを滅ぼそうとしました。ところが、その憤りをも、彼らを完璧に打ちのめすことによって

ご自身の栄光を現したのです。ですから、人の憤りまでが神をほめたたえるという表現になっています。同じようなことを、神は歴史の中で何度も行なわれました。ヨセフを妬んだ兄たちは、彼を憎しみ、殺そうとまでしましたが、その憎しみまでも用いて、神はヨセフによってヤコブの家族を飢饉から救う計画を立てられておられました。神は、パロの心をかたくなにされました。パロが神の言うことを聞かないことさえも、その頑なさを通してご自分の力の栄光を現されたのです(出エジプト 9:16)。そして終わりの日、神は人々のご自身に対する怒り、その反逆さえもご自身が全能者であることを示すために用いられます。「黙示 11:18 諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。」

そしてキリストは初めに来られた時も、実は人々の怒りをご自分の身に引き締めた出来事でした。「十字架につけろ、十字架につけろ」と叫ぶ群衆、「おまえが神の子なら、十字架から降りて来い。」とののしった宗教指導者、これらの怒りも神はご自分の身に引き締められ、神の栄光をたたえるようにされたのです。今、怒りの多い世の中になりました。けれども、その時に怒りを受けて十字架に付けられたキリストを思うことができます。暴虐や流血も見ますが、それらをも必ずご自分の栄光に変えてくださるという希望を持つことができます。

76:11 あなたがたの神、主に、誓いを立て、それを果たせ。主の回りにいる者はみな、恐るべき方に、贈り物をささげよ。76:12 主は君主たちのいのちを絶たれる。地の王たちにとって、恐ろしい方。

神を信じている者は、主に救われたのであれば、その救いにふさわしい応答をしなければいけません。誓いを果たします。そして、周囲のいる王たちはこの方に贈り物を捧げるとありますが、ヒゼキヤ王に対して国々が贈り物を携えてきました(2歴代 32:23)。つまり、これまで神を知らなかった者たちも、主に対してひれ伏さなければいけないということです。これは、キリストが地上に再臨後、千年王国で実現します。

そして、これは新天新地に入る時にも通じる真理です。「ピリピ 2:10-11 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」今、イエスが主であるという告白をするのであれば、それは救われるための告白です。そして、今、その告白を拒んでも後の世においては、イエスが主であると否が応にも認めなければいけなくなります。その時は、裁かれるための告白になります。救いは今です。

3A 変わった右の御手 77

77 指揮者のために。エドトンの調べによって。アサフの賛歌

話は再び、バビロンに捕え移された時の、礼拝者の苦しみと嘆きに戻ります。

1B 乱れる心 1-9

77:1 私は神に向かい声をあげて、叫ぶ。私が神に向かって声をあげると、神は聞かれる。

この言葉は、この賛歌のまとめです。神に向かい声を上げたら、神が聞かれたのですが、それは自動販売機のように聞かれたのではありません。むしろ、どう呻いても叫んでも、全く神に祈りが届かないという霊の衰えの中で、新たな神の備えた道を見出したので答えられました。

77:2 苦難の日に、私は主を尋ね求め、夜には、たゆむことなく手を差し伸ばしたが、私のたましいは慰めを拒んだ。77:3 私は神を思い起こして嘆き、思いを潜めて、私の霊は衰え果てる。セラ
77:4 あなたは、私のまぶたを閉じさせない。私の心は乱れて、もの言うこともできない。

アサフは、眠れぬ夜を過ごしています。夜に、弛むことなく手を差し伸ばしています。それは、心の思い煩いで、神を求めているからこそ思い煩って呻いている様子です。しかし、そのように悶えても何も解決はないので、「私のたましいは慰めを拒んだ」とあります。これは、あまりにも悲しみの中で起こる現象です。その悲しみが心の深いところで沈殿してしまいました。それで、慰めというものを拒むのです。

しかし、彼は神から離れることができません。彼の神に対する思いは強く、それゆえなお叶えられない思いによって霊が衰えていきます。そして、心が乱れて、物が言えないほどになります。私たちの心が潰れると、その話題さえ話すことができなくなるでしょう。まだ、自分の苦しみを口で言い表すことのできている人は、それだけ心が閉じられていないのです。あまりに哀しいので、それを言葉にして言い合わずものなら、その哀しみの中にまた自分を満たしてしまうので拒むのです。

77:5 私は、昔の日々、遠い昔の年々を思い返した。77:6 夜には私の歌を思い起こし、自分の心と語り合い、私のたましいは問いかける。

彼は、神殿のまだある時に、そこで主に礼拝を捧げていた時のことを思い出しています。自分が何を歌っていたのか思い出していました。

77:7 「主は、いつまでも拒まれるのだろうか。もう決して愛してくださらないのだろうか。77:8 主の恵みは、永久に絶たれたのだろうか。約束は、代々に至るまで、果たされないのだろうか。77:9 神は、いつくしみを忘れたのだろうか。もしや、怒ってあわれみを閉じてしまわれたのだろうか。」セラ

主への思いを言い表しているのに、それが叶えられない今、これまでしっかりと握りしめていた

神の真理に対する疑いが出てきました。主は受け入れられていると信じていましたが、拒まれていると感じています。主は愛しておられると思っていましたが、愛しておられないのではないかと感じています。そして主の恵みはとこしえまでだと信じていたのですが、絶たれた。そして約束は代々に至るまでのところが、そうではない。主が慈しみを忘れた、怒って憐れみを閉じた。このように感じていました。

2B 思い起こす主の御業 10-20

77:10 そのとき私は言った。「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。」

ぜひ午前礼拝の説教を、まだ聞いておられない方はお聞きください。彼は、エレミヤの預言を知っていたことでしょう。エレミヤも彼と同じ悩みを持っていました。どんなに民のための執り成して祈っても、その祈りは絶対に聞かないと主は言われたのです。神殿によってわたしはそこにいる、と神はもはや言わないで、むしろ引き抜いた民を再び植えることによって神殿を回復することを約束されていたのです。

これまでと、神の右の手は変わっていたのです。したがって、主がもはや愛されなくなった、約束が実現しない、憐れみを閉ざされたということではなく、別の道に主の愛、約束の実現、憐れみの注ぎを行っておられるということです。そこで彼は希望が湧いてきたのです。再び、今、ここで自分が弱くされているところから主の御業が始まることを思い起こすのでした。

77:11 私は、主のみわざを思い起こそう。まことに、昔からのあなたの奇しいわざを思い起こそう。

77:12 私は、あなたのなされたすべてのことに思いを巡らし、あなたのみわざを、静かに考えよう。

大事ですね、拙速になりがちな私たちですが、静かに考えます。その中で見えてくる、実はすでに始まっていた主の働きがあります。

77:13 神よ。あなたの道は聖です。神のように大いなる神が、ほかにありましようか。77:14 あなたは奇しいわざを行なわれる神、国々の民の中に御力を現わされる方です。77:15 あなたは御腕をもって、ご自分の民、ヤコブとヨセフの子らを贖われました。セラ 77:16 神よ。水はあなたを見たのです。水はあなたを見て、わななきました。わたつみもまた、震え上がりました。77:17 雲は水を注ぎ出し、雷雲は雷をとどろかし、あなたの矢もまた、ひらめき飛びました。77:18 あなたの雷の声は、いくさ車のように鳴り、いなずまは世界を照らし、地は震え、揺れ動きました。77:19 あなたの道は海の中にあり、あなたの小道は大水の中にありました。それで、あなたの足跡を見た者はありません。77:20 あなたは、ご自分の民を、モーセとアロンの手によって、羊の群れのように導かれました。

イスラエルが神に導かれるのは、まさにこの水の分かれる奇蹟によってでありました。イスラエ

ルの民にとって、エジプトから出たものの、海辺の端のところまで宿営をするように神に命じられました。そして、エジプト軍が彼らを追跡したのです。神に命じられてここまで来たのに、そのままエジプトによって滅ぼされるようにされたのか、と彼らは思ったのです。しかし、そうではなく神の手はその水に及び、彼らは大いなる神の力の栄光をその水の分かれによって目撃しました。

これは、キリストご自身の十字架と復活においても同じです。十字架によって、弟子たちのイエス様に対する期待は一気に裏切られたようにさえ見えます。しかし、むしろ十字架によって、神の永遠の罪の赦しが与えられ、十字架によって復活という神の力を目撃することができました。人が弱くされる時は、したがって、次の神の復活の力の道が備えられているということです。

4A 主の真実と人の不実 78

詩篇 78 篇に入ります。ここはとても長い詩篇です。

1B 後の世代に語り告ぐ謎 1-8

78 アサフのマスキール 78:1 私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。78:2 私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。78:3 それは、私たちが聞いて、知っていること、私たちの先祖が語ってくれたこと。78:4 それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り告げよう。主への賛美と御力と、主の行なわれた奇しいわざとを。78:5 主はヤコブのうちにさとしを置き、みおしえをイスラエルのうちに定め、私たちの先祖たちに命じて、これをその子らに教えるようにされた。78:6 後の世代の者、生まれてくる子らが、これを知り、彼らが興り、これをその子らにまた語り告げるため、78:7 彼らが神に信頼し、神のみわざを忘れず、その仰せを守るためである。78:8 また先祖たちのように、彼らが、かたくなで、逆らう世代の者、心定まらず、たましいが神に忠実でない世代の者とならないためである。

アサフは、後世の人々に対してこの言葉を残そうとしています。それを、「たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。」と言っています。イエス様が、天の御国の奥義のたとえを語られたことについて、マタイが、「それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。「わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう。」(マタイ 13:35)」と言いました。私たちの考える喩えは、何か分からない事柄があって、それを分かり易くするための手段、道具であります。けれども、ここでの喩えは、誰でも良く知っているような話をするだけで、その話の中で真理について耳が開かれた者だけが聞くことができるもの、ということです。ですから、耳の開かれていない人たちにとっては、自分も身近な事柄が語られているのですが、それ以上の意味合いはありません。けれども聞く耳のある人は、それを悟るのです。イエス様の四種類の土の喩えは、群衆はだれでもその言われていることは分かりました。けれども、弟子たちだけがその意味していることが分かりました。それと同じように、これからアサフが語り告げる事柄も、イスラエルの民の歴史を有体に語っています。その物語に対して、実は大きな教訓があるのです。それを聞く耳のある人が悟るのです。

次世代の子らに伝えるための賛歌ですが、前回の学びでも老年になったダビデが、「あなたの力を次の世代に、あなたの大能のわざを、後に来るすべての者に告げ知らせます。(71:18)」と言いました。彼らはこれをとても大切にしていますし、信仰者も大切にしないといけません。教えることは、主が命じられた、その掟であります。さらに、その掟に逆らう世代にならないためであると言っています。これから見ていくと分かりますが、二つの流れがあります。一つは、「主が民に良くしてくださっていること」です。もう一つは、「民はその主の慈しみに応答していない。」ということです。主が良くしてくださっているのに、民は反抗的です。けれども、それでも主は彼らを見捨てなかったという流れです。

2B エフライムの忘却 9-72

1C 主の備え 19-39

78:9 エフライムの人々は、矢をつがえて弓を射る者であったが、戦いの日には退却した。78:10 彼らは、神の契約を守らず、神のおしえに従って歩むことを拒み、78:11 神の数々のみわざと、神が見せてくださった多くの奇しいこととを忘れてしまった。

アサフの喩えは、エフライムの人々から始まり、そしてエフライムの失敗で終え、それゆえ神がダビデを選ばれたという話の流れで終えます。エフライムは北イスラエルの代表的な部族であり、主がダビデの家を建てられたその経緯を知り、それで北イスラエルの辿った道を歩むことのないよう、教訓にしているのです。教訓ということは大事です。パウロが、偶像礼拝の罪を一部に犯していたコリントの教会に対してこう言いました。「1コリント 10:11-12 これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。」自分たちは立っていると思っても、イスラエルの民のように倒れる可能性はあるのです。だから気をつけなさい、という戒めです。

エフライムの教訓とは何なのでしょう？ここに、「矢をつがえて弓を射る者」とあります。エフライムは軍事力のある強い部族でした。それだけ力が与えられていたにも関わらず、「戦いの日には退却した。」のです。つまり、主から与えられている力と知恵があるのに、その賜物を用いて神に仕えなかった、従わなかったということでもあります。

ヨシュア記に、ヨシュアとエフライム族との会話がそのことをよく表しています。「17:14-18 ヨセフ族はヨシュアに告げて言った。『主が今まで私を祝福されたので、私は数の多い民になりました。あなたはなぜ、私にただ一つのくじによる相続地、ただ一つの割り当て地しか分けてくださらなかったのですか。』ヨシュアは彼らに言った。『もしもあなたが数の多い民であるなら、ペリジ人やレファイム人の地の森に上って行って、そこを自分で切り開くがよい。エフライムの山地は、あなたには狭すぎるのだから。』ヨセフ族は答えた。『山地は私どもには十分ではありません。それに、谷間の地に住んでいるカナン人も、ベテ・シェアンとそれに属する村落にいる者も、イズレエルの谷に

いる者もみな、鉄の戦車を持っています。』するとヨシユアは、ヨセフ家の者、エフライムとマナセにこう言った。『あなたは数の多い民で、大きな力を持っている。あなたは、ただ一つのくじによる割り当て地だけを持っていてはならない。山地もあなたのものとしなければならない。それが森であっても、切り開いて、その終わる所まで、あなたのものとしなければならない。カナン人は鉄の戦車を持っていて、強いから、あなたは彼らを追い払わなければならないのだ。』エフライムは、相続地の割り当てが小さいことを不満に思っていました。彼らは事実、人数が多かったのです。けれども割り当て地は小さくありません、ただ先住民がいるのです。戦って、そこを得ればよいのです。ところがそれを怠っていました。これが、神から力が与えられているのにそれを用いないという、霊的怠惰です。

そこで、そのような主の恵みに対して応答していない怠惰な心のために、数々の偶像礼拝の罪に陥ったのだというのが、アサフの言っていることであります。

78:12 神は、彼らの先祖たちの前で、エジプトの地、ツォアンの野で、奇しいわざを行なわれた。
78:13 神は海を分けて彼らを通らせ、せきのように水を立てられた。78:14 神は、昼は雲をもって、彼らを導き、夜は、夜通し炎の光で彼らを導いた。78:15 荒野では岩を割り、深い水からのように豊かに飲ませられた。78:16 また、岩から数々の流れを出し、水を川のように流された。

ここまでが主のしてくださった良いことです。けれども、次に「それなのに」とあります。

78:17 それなのに、彼らはなおも神に罪を犯し、砂漠で、いと高き方に逆らった。78:18 彼らは欲するままに食べ物を求め、心のうちで神を試みた。78:19 そのとき彼らは神に逆らって、こう言った。「神は荒野の中で食事を備えることができようか。78:20 確かに、岩を打たれると、水がほとばしり出て流れがあふれた。だが、神は、パンをも与えることができようか。ご自分の民に肉を備えることができようか。」78:21 それゆえ、主は、これを聞いて激しく怒られた。火はヤコブに向かって燃え上がり、怒りもまた、イスラエルに向かって立ち上った。78:22 これは、彼らが神を信ぜず、御救いに信頼しなかったからである。

民数記に書かれている記録です(11:4-6)。彼らは、主から数々の備えが与えられました。彼らの責任は、その真実と慈しみを今の自分たちの置かれている状況に適用されることです。これが22節に書いてある、「神を信じること、御救いに信頼すること」であります。主がこれまで良くしてくださった、その恵みにあって成長する努力を私たちは怠ってはいけません。絶えず、聖書にある約束を思い出し、そしてこれまで主が行ってくださったことにしたがって、これからもなおのこと自分を救ってくださることを、具体的な場面において信じるのです。

78:23 しかし神は、上の雲に命じて天の戸を開き、78:24 食べ物としてマナを、彼らの上に降らせ、天の穀物を彼らに与えられた。78:25 それで人々は御使いのパンを食べた。神は飽きるほど

食物を送られた。78:26 神は、東風を天に起こし、御力をもって、南風を吹かせられた。78:27 神は彼らの上に肉をちりのように、翼のある鳥をも海辺の砂のように降らせた。78:28 それを宿営の中、住まいの回りに落とした。78:29 そこで彼らは食べ、十分に満ち足りた。こうして彼らの欲望を、かなえてくださった。78:30 彼らとその欲望から離れず、まだ、その食べ物が口にあるうちに、78:31 神の怒りは彼らに向かって燃え上がり、彼らのうちの最もがんじょうな者たちを殺し、イスラエルの若い男たちを打ちのめされた。

神は、彼らを貪りのままにしておかれるという形で裁かれました。神の裁きには、人をその欲望のままに引き渡すというものがあります。もし私たちが、主の戒めを聞き入れず、そのまま自分のしたいことを押し通すなら、神はそれを無理やり止めないのです。これを人は、「神は私のしていることを見ていない。こんな悪いことをしていても、何も悪いことが起こらないではないか。」という愚かな考えを抱きます。それで自分のしていることの結末を後で刈り取るのです。

78:32 このすべてのことにもかかわらず、彼らはなおも罪を犯し、神の奇しいわざを信じなかった。
78:33 それで神は、彼らの目をひと息のうちに、彼らの齢を、突然の恐怖のうちに、終わらせた。

これは、カデシュ・バルネアで約束の地に入ることを信じることができず、四十年間、荒野をさまようようにされました。二十歳以上はそこで死に絶えます。カナンの地に偵察に行った十二人のうち、イスラエル人に不信を抱かせた十人は殺されます。その時の話でしょう(民数 14:37)。

78:34 神が彼らを殺されると、彼らは神を尋ね求め、立ち返って、神を切に求めた。78:35 彼らは、神が自分たちの岩であり、いと高き神が自分たちを贖う方であることを思い出した。78:36 しかしまた彼らは、その口で神を欺き、その舌で神に偽りを言った。78:37 彼らの心は神に誠実でなく、神の契約にも忠実でなかった。

人々が死んだ時に、主を求めたのですが、それも束の間ですぐに罪の中に入っていました。「悔い改めます」という言葉は連発するのですが、そこには真実味がないのです。「とても皮相的な、浅薄な悔い改め」ということができます。これも、私たちに対する戒めです。確かに神は、罪を告白する者を赦されます。しかし、その告白自体が真実を伴った告白なのか？ただ、今の状態が苦しいから赦してもらえて楽になりたいから告白していることはないでしょうか？真実に、神との関係を修正したいと願っている、真実な悔い改めが必要です。

78:38 しかし、あわれみ深い神は、彼らの咎を赦して、滅ぼさず、幾度も怒りを押え、憤りのすべてをかき立てられはしなかった。78:39 神は、彼らが肉にすぎず、吹き去れば、返って来ない風であることを心に留めてくださった。

これが主の取り扱いです。イスラエル民は応答していないのですが、主はあきらめることはありません。

ません。なぜか？もしご自身の怒りを下されるのであれば、彼らは何度滅んでもおかしくないからです。肉に過ぎない、風のようなものである、ということです。私たちがみな、肉なる者であるということを知ることは必要です。どんなに神に用いられた器でも、他の人たちと同じように罪を犯してしまうのです。

2C 主の戦い 40-64

78:40 幾たび彼らは、荒野で神に逆らい、荒れ地で神を悲しませたことか。78:41 彼らはくり返して、神を試み、イスラエルの聖なる方を痛めた。78:42 彼らは神の力をも、神が敵から贖い出してくださった日をも、覚えてはいなかった。

「覚えること」、この信仰の行為がとても必要です。聖霊がイエスの語られたことを思い起こしてくださり、その思い出したことに従って私たちは行動します。それを怠ると、たちまち彼らと同じように偶像礼拝、自分の欲望を満たそうとしてしまうのです。

78:43 神が、エジプトでしるしを、ツォアンの野で奇蹟を行なわれたことを。78:44 神がその川を血に変えられたので、その流れを飲むことができなかった。78:45 神は彼らに、あぶの群れを送って彼らを食わせ、かえるを送って彼らを滅ぼされた。78:46 また、彼らの作物を、油虫に、彼らの勤労の実を、いなごに与えられた。78:47 神は、雹で、彼らのぶどうの木を、いなずまで、彼らのいちじく桑の木を滅ぼされた。78:48 神は、彼らの家畜を、雹に、彼らの家畜の群れを、疫病に渡された。78:49 神は、彼らの上に、燃える怒りと激しい怒り、憤りと苦しみ、それに、わざわいの御使いの群れを送られた。78:50 神は御怒りのために道をならし、彼らのたましいに死を免れさせず、彼らのいのちを疫病に渡された。78:51 また、エジプトのすべての初子、ハムの天幕の彼らの力の初めの子らを打ち殺された。

主がエジプトに対して下された十の災いです。

78:52 しかし神は、ご自分の民を、羊の群れのように連れ出し、家畜の群れのように荒野の中を連れて行かれた。78:53 彼らを安らかに導かれたので、彼らは恐れなかった。彼らの敵は、海が包んでしまった。

紅海が分かれ、その中を通り、エジプト軍は海の中に沈みました。そして次は一気にヨシュア記に入ります。

78:54 こうして神は、ご自分の聖なる国、右の御手で造られたこの山に、彼らを連れて行かれた。78:55 神はまた、彼らの前から国々を追い出し、その地を相続地として彼らに分け与え、イスラエルの諸族をおのおのの天幕に住ませた。

イスラエルの地、そしてエルサレムにまで導かれました。そして土地の割り当てもヨシュアは行いました。

78:56 それなのに、彼らはいと高き神を試み、神に逆らって、神のさとしを守らず、78:57 もとに戻って、彼らの先祖たちのように裏切りをし、たるんだ弓の矢のようにそれてしまった。

再び出てきました、「それなのに」という言葉です。主が出エジプトから約束の地まですべてを行ってくださったのに、それに感謝しなかったということが大きな問題です。主がなされたことを覚えて、その中でへりくだり、神に感謝しないでいたので、また同じことを繰り返しました。

興味深い表現があります、「たるんだ弓の矢」とあります。弓がもともと弛んでいるので、矢をいくら努力して放っても、的を射ることはありません。同じように、彼らの内に主との生きた、真実な関係がないので、何をやってもなよなよして、主の命令に従っていないのです。問題は、その時に敵に勝てなかったなど、そういった失敗ではなく、主ご自身にあって強められていないという関係の問題なのです。

78:58 また彼らは、高き所を築いて神の怒りを引き起こし、刻んだ像で、神のねたみを引き起こした。78:59 神は、聞いて激しく怒り、イスラエルを全く捨てられた。78:60 それで、シロの御住まい、人々の中にお建てになったその幕屋を見放し、78:61 御力をとりこに、御栄えを敵の手に、ゆだねられた。78:62 神はまた、御民を剣に渡し、ご自分のものである民に対して激しく怒られた。78:63 火はその若い男たちを食い尽くし、その若い女たちは婚姻の歌を歌わなかった。78:64 その祭司たちは剣に倒れ、やもめたちは泣き悲しむこともできなかった。

ここで話が、ついに北イスラエルに戻ります。士師の時代、イスラエルの民が偶像を拝んでいました。そして、サムエル記に入ります。エリが祭司の時に、ペリシテ人と戦います。ところが、持っていた神の箱をペリシテ人に奪われます。その時から、シロにあった幕屋から契約の箱がなくなってしまったのです。つまりアサフが言いたいのは、主ご自身の臨在を示していた契約の箱がなくなったのは、数ある靈的怠慢からであったということです。

3C ユダ族の選び 65-71

78:65 そのとき主は眠りから目をさまされた。ぶどう酒に酔った勇士がさめたように。78:66 その敵を打ち退け、彼らに永遠のそしりを与えられた。78:67 それで、ヨセフの天幕を捨て、エフライム族をお選びにならず、78:68 ユダ族を選び、主が愛されたシオンの山を、選ばれた。

とても興味深い表現ですが、酔いのさめた勇士であります。これまで靈的に眠っていたような状態で、緩慢な時が続きましたが、神が大きな靈的活性を与えられます。サムエルを預言者として立て、そしてダビデをお選びになられます。これまで敵に打ちのめされていたばかりだったのが、

根本的に敵を打ちのめすことに成功しました。それで、主はヨセフに対して二倍の分け前を与えられていたのですが、ユダを選ばれ、シオンを選ばれたのです。

78:69 主はその聖所を、高い天のように、ご自分が永遠に基を据えた堅い地のように、お建てになった。78:70 主はまた、しもべダビデを選び、羊のおりから彼を召し、78:71 乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て、御民ヤコブとご自分のものであるイスラエルを牧するようにされた。78:72 彼は、正しい心で彼らを牧し、英知の手で彼らを導いた。

先ほどから「永遠」という言葉が出てきます。これまでイスラエルが失敗していたけれども、今、ここでダビデによって永遠の国を立てるとお決めになったのです。その心は羊飼いの心でした。ダビデは羊飼いと同じように、羊を賢く養っていきました。ここに、私たちはダビデの子イエス・キリストの姿を見ます。これまでモーセによる契約によって生きていたイスラエルの民は、ことごとく失敗しました。けれども、キリストによって、その新しい契約によって、ただ一度、永遠の救いを成し遂げてくださったのです。

ですから、アサフがエフライムではなく、ユダを強調したように、私たちは今、聞いていった「主の慈しみに対する鈍い反応」から自らを断ち切り、御霊によって聖別を受け、ただ一度で永遠の救いを成し遂げたキリストにしっかりと留まります。